

chromatophores in the medullary cell increase in number.

Abnormal spore at first divides into two cells, and the second division is perpendicular to the first.

文 献

- 1) INOH, S. (1936): On tetraspore formation and its germination in *Dictyopteris divaricata* OKAM., with special reference to the mode of rhizoid formation. Sci. Pap. Inst. Algol. Res., Fac. Sci., Hokkaido Imp. Univ. **1**, 213-219. 2) NISHIBAYASHI, T. & S. INOH (1959): On the life history in Dictyotaceae. I. Tetraspore-development in *Dictyota dichotoma* (HUDS.) LAMOUR., *Dictyopteris divaricata* (OKAM.) OKAM., and *Padina japonica* YAMADA. Bot. Mag. Tokyo, **72**, 261-268. 3) TOKIDA, J., T. MASAKI & H. YABU (1953): On the rhizoids of *Dictyopteris divaricata* (OKAM.) OKAM. Rep. Bull. Fac. Fish., Hokkaido Univ. **4**, 149-156.

ブルウキモの漂着

時 田 郇

J. TOKIDA: Stranding of *Nereocystis luetkeana*
on the eastern coast of Hokkaido

去る6月7日の朝日新聞に「全長15メートル余の怪物、北海道の海岸で発見」と題する写真入りの記事が載り、北大水産学部にとって鑑定してもらうことになっていると書かれていたので国内各地から4通、海外の新聞にも帯広発共同通信として報道されたので海外から3通、合計7通の問い合わせの手紙を受取った。ところが翌日の新聞に「ヘビのような怪物は海草でした——米海軍基地から知らせ」という記事が出てけりがついたと見え、現物はとうとう送って来なかった。写真は非常に良くとれていて、一見して直ちにブル浮藻の茎であるとわかるので、写真のコピーを同新聞北海道支社にお願いしたところ、ここに掲げる2枚を送って頂いた。読者の新聞写真コンクールの応募作品とのことである。この機会に撮影者に敬意を表し、同支社広報部の御好意を感謝する。

今回の漂着は北海道中川郡豊頃村大津附近の海岸で、6月5日午後5時ごろ敦賀吉春さんという漁夫が波打ちわに発見したもので、長さ15m、頂部

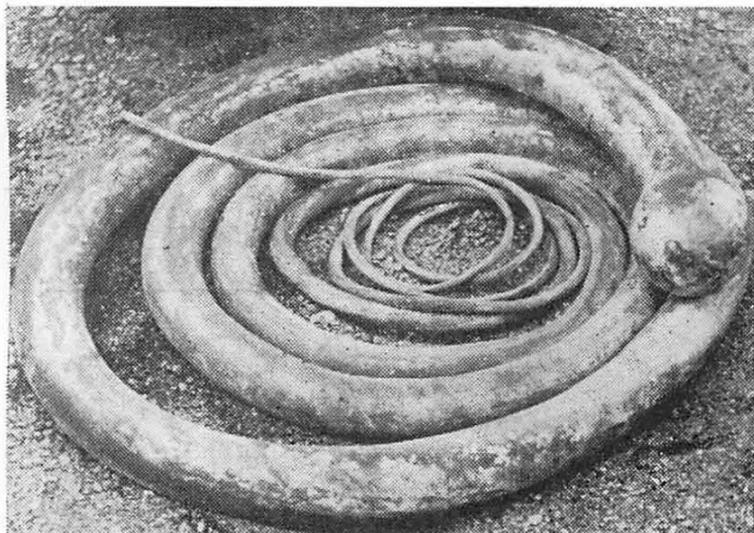


写真 A. 十勝大津海岸に漂着したブルウキモの茎。帯広市小野善也氏撮影。朝日新聞北海道支社報道部の御好意による。

の周囲 40 cm, 中部の周囲 20 cm, 下部は次第に細くなっている, と記してある。根と, 頂部の胞子葉は取れていて無い。

ブル浮藻の漂着については本誌 9 巻 1 号に久内清孝先生が岡村金太郎先生の 2 報文と筆者の小文を紹介された。上記写真の複写をお送りしたところ御返事を頂いたが, その中に「新聞記事は恐

ろしく一般人を刺戟するようです」とあった。その通りで, ヘビのような怪物とあったため, 多くの人の注意を惹いたらしく 7 通もの問い合わせとなったのであろう。そのうち, 興味あるものを引用することを許していただきたい。

「私もこれとたしかに同じ物を 40 年前に北太平洋で沢山見た様に思います。この様なものが 10 個か 20 個, ひとかたまりにもつれあって, いくつも荒い波の間に沈んでいました。当時私は七つになったばかりの少女でしたし, たった一人でマニラ丸という船にのせられてヴァンクーバー (シアトル?) から横浜へ帰る途中でしたが, どんよりと暗い荒海の上に大蛇の様に思える大きな頭のあるものが, いくつも群になって浮いているのを見ました時はとてもおそろしいでしたが, よくよく見てみると死体の様にそのもの自体は動けない事が解りましたので海草の一種が荒波にもまれて海の底から浮び上ったのだと一人できめて, おそろしさをなぐさめていましたが, その本体が教えて頂きましたなら幸と存じます。40 年来のなぞが解決するわけです。」(世田谷区竹崎美恵子夫人)。竹崎夫人はその後のお便りで札幌とも縁故のある方とわかり, 「怪物こんぶのとりもつ不思議な御縁をあれこれと思いめぐらしております」とあった。

海外からの一つは Dr. BRUCE S. WRIGHT (Director, Northeastern Wildlife Station, University of New Brunswick, Fredericton, N. B., Canada) から

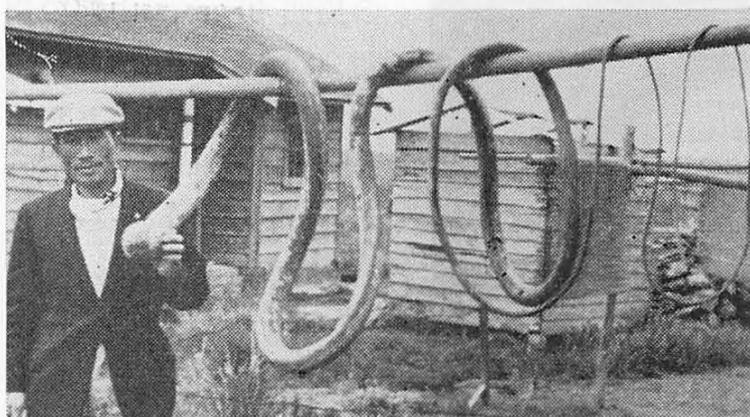


写真 B. 十勝大津海岸に漂着したブルウキモの茎を竿に掛けて全形を示す。

小野善也氏撮影。

朝日新聞北海道支社報道部提供。

で6月7日付新聞切抜が付けてあり、「記事の中の大蛇の様な生物というのは巨大イカ Architeuthidae の触手に一番よく似ていると思う。我々は数年来、巨大イカの世界各地の漂着を plot する仕事に興味をもっており、雑誌や放送で一般の注意を惹きその報告を依頼しているが、漂着は予

想以上に頻繁なものらしく、後進国では報道されずにいるものがあると思う。」と記し、回答に対する礼状の中には「巨大イカの日本沿岸漂着のデータを得ることに非常に興味をもっている。漂着の日附、標本の要点と大きさを知りたい。写真のコピーには経費を支払う。誰にも余り迷惑とならぬ程度に御斡旋願いたし。」とあったので、この機会に過去の記録をお知りの方に、また将来漂着の事実遭遇された方にこの希望をお伝えして御協力をお願いする次第である。

海外からの問い合わせの他の一つは Australian Museum, Sydney の元職員である J. R. KINGHORN という方からのもので、「この怪物は外部が附着物で被われたホースか、或いは海藻の茎ではあるまいか」と、妥当な意見を述べておられる。もう一つは Philadelphia で機械商を営む Mr. JOHN NUTTALL から「Sea monster baffles Japan」という標題で書かれた新聞切抜が付けられ、「娘がこの怪物の正体を是非知りたいというので」と父親の愛情からの問い合わせであった。

ブル浮藻の生態と資源量については最近カナダの British Columbia^{1,2)} と加州の Carmel³⁾ に於ける調査が報告され、B. C. ではアルギン酸原料として採取可能な資源量が *Macrocystis* と合わせて年に75~100万トン、これに他のコンブ類を加えると年に少なくとも150万トンと見込まれ、或いはこの3倍乃至20倍が期待できるとする計算⁴⁾もあるという。この資源量の主部を成すものがブルウキモである。Carmel では遊走子形成の盛期は6~9月、秋に

多量の植物体が海岸に打ちあげられ、水面を被っている密生状態は12月末までに失われる。少数の植物体は1月まで見られ、4月には高さ1呎の若い体を見ることがあるという。1本のブルウキモに附着しているウニの数が5,280個をかぞえた例があり、ウニやアワビの食害は相当なものなので、これらを餌としている otters (カワウソ) が居ることは *Nereocystis-Pterygophora* 群落の繁茂を助けていることになるとのことである。

Summary

A giant snake-like creature or monster reported last June in the newspaper Asahi and the Associated Press dispatch from Obihiro, Japan, as discovered by a fisherman on the beach at Ohtsu, Province Tokachi in Hokkaido, was easily known from its photograph (Photo A in this paper) that appeared in the Asahi to be a long stipe of "Bull Kelp", *Nereocystis luetkeana* (MERTENS) POSTELS et RUPRECHT. In this paper are given: two photographs of the kelp which were taken by Mr. Y. ONO of Obihiro City and sent from the Hokkaido Branch of the Asahi (Photos A & B); some interesting and noteworthy contents of the letters which were sent to our laboratory from seven persons in and out of Japan to inquire what the "monster" turned out to be; and a brief ecological and economical notes of the kelp on the basis of the latest Canadian and American publications.

引用文献

- 1) SCAGEL, R. F. (1960): The role of plants in relation to animals in the marine environment. Proc. 20th Ann. Biol. Colloq. Oregon State Coll. Apr. 1959, 9-29.
- 2) ——— (1961): Marine plant resources of British Columbia. Bull. Fish. Res. Board of Canada, no. 127, 1-39.
- 3) MCLEAN, J. H. (1962): Sublittoral ecology of kelp beds of the open coast area near Carmel, California. Biol. Bull. **122** (1), 95-114.
- 4) HUTCHINSON, A.H. (1953): Marine plants of economic importance of the Canadian Pacific coastal waters. Proc. 7th Pacific Sci. Congr. **5**, 62-66.